

特集 竹村和子さんのフェミニズム／ジェンダー研究

竹村和子さんの急逝がもたらした欠落は、彼女自身や彼女の言葉に触れた全ての者にとって、今なお何をもってしても埋めがたい。彼女は、ジュディス・バトラー（Judith Butler）等の翻訳を通じて、最先端のフェミニズム思想を日本語で思考する手立てをもたらすと同時に、彼女自身がそうした様々な理論の検討を通して今日のフェミニズム理論の最も先鋭な問題に取り組み、それを自らの言葉で、ぎりぎりまで思考し、論じたことによって、今日フェミニズムを思考し、実践する者すべてにとって不可欠な理論的指針であり続けている。

本特集は、彼女の文学、映像、思想の領域における論考をそれぞれにまとめた形で出版された三冊の、最後の書籍を、私達編集担当者が現時点で最もふさわしいと考えた3人の評者の書評を通して再検討し、彼女が私達に残した成果と問題を明らかにすることを目指している。加えて、彼女の薫陶を受けた2人の若い研究者の研究ノートを通して、それが次世代にどのように引き継がれてゆくのか、という状況の一端を示すことも試みた。

たいへんお忙しい中書評をお引き受けいただき、真摯に竹村さんの言葉と向き合うことでこの上なく力のこもった論考をくださった3人の評者と、2人の若手研究者が身を持って示してくださったとおり、今回の企画が、竹村さんが残した言葉に一人一人があらためて向き合い、それを受け止め、それぞれに発展させることで、彼女の生命を絶やすことなく抱き続ける良き機会となれば、編者（天野知香と館かおる）の責は果たされるといえるだろう。

注記 なお、彼女の著作、翻訳書は、本誌で取り上げた『境界を攪乱する——性・生・暴力』に掲載されているが、竹村和子の思考の過程を跡づける資料として重要であると考え、初出論文一覧及び講演、セミナー、ゼミでの写真も掲載した。

語る者たちの連鎖の中で ——竹村和子さんのF-GENSでの活動を中心に

天野 知香

竹村さんは、2003年度から5年間、本学で展開された21世紀COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア——〈女〉〈家族〉〈地域〉〈国家〉のグローバルな再構築」(F-GENS)において、理論構築と文化表象を担当する「プロジェクトD」のリーダーとして、数々の内外の研究者等の招聘やシンポジウム、研究会の組織、データベース作成に携わった。その活動の記録はプログラム期間中に活動報告として毎年刊行された『F-GENSジャーナル』誌、およびこのプロジェクトのまとめとして出版された全五巻のシリーズの一冊として、竹村さん自身の編著になる『ジェンダー研究のフロンティア5 欲望・暴力のレジーム——揺らぐ表象／格闘する理論』（作品社、2008年）にまとめられている。竹村さん自身が考えたこの書籍のタイトルに挙げられているとおり、欲望と暴力の問題は、いみじくもこの時

期の竹村さんの思考の中核をなす問題であったと言って良いだろう。

このCOEでの竹村さんの活動を、プロジェクトDに参加したメンバーとして、振り返ってみると、この活動が、彼女の思考の展開とその波及において、著述とは別の側面を含めて重要な意義をもったものであったことが浮かび上がる。

その一面は英語圏の若い学生、大学院生を中心とした文献検討会等の活動がもたらした教育的な意義であり、その活発な活動は、このプロジェクトの教育上の成果に重要な役割を果たし、次世代を育てることになったことは言うまでもない。

竹村さんはまた、COEの活動として、日韓の研究者たちによる二度に渡るシンポジウム（その2007年の成果はプロジェクトD作成のCOE刊行物『文化表象の政治学——日韓女性史の再解釈』に記録された）の他、様々な海外の研究者の招聘に関わって講演会やセミナー等を実現し、その議論を日本の聴衆に開かれたものとする機会をもたらし、また対話を通して彼女たちの思想を批判的に考察する手立てを示した。そうした対話の相手は、トリン・T・ミンハ（Trinh T. Minh-ha）、エステル・フリードマン（Estelle Freedman）、ジュディス・ハルバーシュタム（Judith Halberstam）、エイミー・ウィリアムズ（Amy Williams）、ジョアン・コプチェク（Joan Copjec）、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Spivak）、そしてジュディス・バトラー（Judith Butler）といった、竹村さんでなければ受けて立つことのできない豪華なメンバーであったが、こうした研究者との対話は、竹村さん自身の思想展開とも深く結びついているのは言うまでもない。とりわけ本学の講堂が満席になるほどの聴衆が詰めかけたバトラーの講演会と、そこでの応答は、竹村さんとバトラーの信頼に満ちたやりとりとともに、貴重な歴史的出来事として記憶される。

他方全体に関わるシンポジウム等の活動に目を向けると、そこでは竹村さん自身の思想的展開が直接表明される場ともなっていた。初年度の、このプロジェクトの「進水式」と竹村さん自身が位置づけた、2003年のプロジェクトDのシンポジウム「ジェンダー研究の理論と表象分析のいま——国家・資本・表象の共謀と攻防」では司会、発題として、「国家」「資本」「表象」をテーマの中心に据えている。近代における国家的枠組みと性配置のかかわり、さらには国家的枠組みやそこでの性制度を背景にしながら、国家の枠組みを超えて展開する資本の運動と、それを強化／逸脱する表象の緊密な関わりが前提とされる一方、こうしたいわば当時のジェンダー研究の基本的な認識からさらに一步踏み出して、近代の枠組み自体の液状化に伴ってひきだされる問題系に表象を通して取り組む方向へと関心を向けることを促している。

翌年の統括プロジェクトによる第一回シンポジウム「グローバル化、暴力、ジェンダー」で、発表者として登壇した竹村さんの発言「生と死のポリティクス——暴力と欲望の再配置」は、社会における欲望の認可・非認可を通じた自己形成とそれがはらむ他者への暴力に代わって、新たに浮上しつつある暴力の様態を分析するものである。竹村さんはこの中で、ジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben）の「ホモ・サケル」を巡る議論の盲点をつく形で、アブグレイブでの虐待写真を引きながら、現代の消費文化のシステムに従う中で自死的暴力に駆り立てられる、（非）主体形成のメカニズムを問題にする。

本特集の中で清水晶子さんの論考がきわめて適切に明らかにしているように、竹村さんにとって重要な関心の一つは、境界の攪乱がもたらす自己破壊的暴力と人間主体の液状化に伴う自死的暴力の問題であった。現実の暴力や暴力の表象の問題と、バトラーが提示したような構築された身体や性に関する観念的な境界の攪乱が実体化された歴史を持つ身体にもたらす暴力性を、人間主体の「液状化」を通し

て、ひとつづきの問題として考察の対象としたことは、竹村さんによる重要な問題提起といえるだろう。「暴力」の問題が、竹村さんにとって、このように一般に考えられるような現実の世界と、理論的な境界の攪乱という一見観念的な領域とを、繋ぐ形で問題化されたのは、映像や文学に関する斉藤綾子さんと越智博美さんの書評が明らかにしたように、竹村さんの理論が常に表象を通して思考され、具体的な感覚や感情に結びついており、何よりもその理論とそれを語る言葉が単に空虚な観念ではなく、文字通り身を切るような具体性を持って捉えられていたからに他ならないともいえるだろう。

第二回のF-GENSシンポジウムでも竹村さんは『『美とエロティシズムと死』の領有——2つの三島映画（2009）と憲法改正』と題した発表で、表象分析を通して純愛プロットによる死の領有がはらむ政治的意味を論じ、さらに第四回では「人間と非人間——死をめぐる（バイオ）ポリティクス」と題して再びアガンベン思想に踏み込んで、人間と非人間の境界の液状化と暴力をめぐる議論を深めてゆくことになる。こうした彼女の発言の記録は上に挙げたCOEの出版物に残されているので詳細は省くが、このように見てゆくと、COEでの竹村さんの活動は、彼女のこの上なく希有な思想の展開を示す貴重な軌跡でもあったことがわかる。

『F-GENS ジャーナル』を手にとり、2004年当時のシンポジウムにおける竹村さんの発表に対する私自身のコメントを振り返ると、明らかに当時において、竹村さんの問題意識を的確に受け止めてそれを深めることはできていない。しかし、現在に至って、彼女の問題提起が私の中に深い痕跡をもたらして、折々に呼びかけ、その後の考察を促していることに気付かされる。おそらく、竹村さん自身やその言葉に触れた者達の多くが、様々な形で、多かれ少なかれ彼女から何かを受け取り、背中を押されてきたに違いない。その言葉を受けとめて、さらに語り続けること、それこそが、現在の状況の中で、生命をつなぐ手立てに他ならないだろう。

竹村和子さんとジェンダー研究センター

館 かおる

竹村和子さんが、ジェンダー研究センターと深く関わった時期は、彼女が、魅力的で緻密なアメリカ文学研究者から、鋭利な表象研究者、そして稀代のフェミニズム批評理論家として大きな変貌を遂げて行く、そのプロセスと重なると言っても過言ではない。

竹村さんは、1996年4月にお茶の水女子大学に赴任した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センター（以下IGSと略）は、1975年に女性文化資料館として創設され、10年ごとの時限付き施設だったので、1986年に女性文化研究センターに改組し、そして1996年に再改組したところだった。まさにその直後に、竹村さんが私たちの前に現れたことは、何という幸運だったかと今にして思う。その頃の竹村さんは、まだフェミニズムを全面に掲げていなかったが、1年も経たないうちに、もはや躊躇することは何もないという勢いで、IGSの活動に参加し、研究協力員や研究員として研究プロジェクトを推進し、2000年4月からIGSの運営委員となり、21世紀COE「ジェンダー研究のフロンティア」（F-GENS）が終了する2008年3月まで、様々なかたちで成果をもたらした。また、IGSに、研究機関研究員、研究支援推進員という、研究員と研究補佐の技官のポストが付いたことも、センターの活動を支える大きな力となったが、竹村さんは英文科のポスドク院生にこのポストへの応募を促し、彼女らはIGSの活動の中で力をつけ、女性学やジェンダー研究に造詣の深い英米文学研究者として就職していった。

1996年当時のIGSの専任教員は、女性文化研究センター時代に引き続き、原ひろ子教授と私の二人のみであったが、日本における女性学・ジェンダー研究を国際的なレベルに確立するために、海外の優れた研究者を招聘する外国人客員研究員（教授）制度が認められたこともあり、意気軒昂であった。外国人客員研究員の滞在期間は、3ヶ月から最長1年間であり、フェミニズム、ジェンダー研究を精力的に進めている招聘者選びにつき、竹村さんは熱心に相談に乗ってくれた。そして1998年度は、トリン・T・ミンハの招聘とセミナーの開催が実現した。竹村さんは、トリンの『女性・ネイティヴ・他者——ポストコロニアリズムとフェミニズム』（岩波書店、1995、2011年新版刊）を翻訳刊行したばかりであり、当時IGSの国内客員研究員であった早稲田大学教授の小林富久子さんもトリンの『月が赤く満ちる時——ジェンダー・表象・文化の政治学』（みすず書房、1996年）を刊行する直前であった。トリンは、1998年5月初めから8月末まで滞在し、夜間セミナーは、"Naming, Informing, Narrating: Identities across Difference"（名づけること、告げること、語ること——差異を横断するアイデンティティ）と題され、彼女が制作した映画を視聴して、講義を聞くスタイルを取り、聴衆を魅了した。1998年7月4日の公開講演会は、"Boundary Event: Color, Interval, and Multiplicity in the Visual Field"（境界上の出来事——視覚領域における色彩、間隙、多層性）と題された。真夏の、冷房設備がない、250人満員の教室にもかかわらず、トリンは講演を中断したくないと言って休憩もとらず、汗も拭わず、凝縮した密度の濃い語りを繰り広げた。「時の密度」を寺の鐘の響きの伝播により語ったトリンの言葉と共に、その時の感覚は今でも思い起こすことができる。トリンは、その頃、女性学、文学理論、哲学、人類学、社会学、映画理論など、様々な既存の学問分野を横断し、自明のものとされてきたそれらの学問の前提を根底から問い直す作業を行っていると言われていたが、当時、東京工業大学から単位互換制度を活用して大学院の私のゼミに参加していた院生が、トリンの講演を聞き、量子力学の「励起」を説く鍵になると興奮していたことが記憶に残っている。また、トリンが、日本での映画制作の際に、釘を一本も使っていない苔むした日本の寺を撮りたいというので、竹村さんと手分けして探したこともあった。トリンに向き合いながら、竹村さんも高揚していた。その時に制作した映画、The Fourth Dimension (2001 on Japan) は、再びトリンを招聘した21世紀COE開始期の2003年10月6日に、講演会に先立ち上映された。

1999年3月、竹村さんは、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』（青土社、1999年）を翻訳刊行した。それは、彼女の母の不慮の事故による急逝直後のことだった。バトラーの言う「Agency エイジェンシー」を「行為体」、「Performativity パフォーマティヴィティ」を「行為遂行性」と翻訳した、その核心をついた概念把握は、その後、日本の思想界、言論界、学界に見事に定着した。『ジェンダー・トラブル』の副題「フェミニズムとアイデンティティの攪乱」の「Subversion 攪乱」と共に、「行為体」及び「行為遂行性」は、学生や研究者たちの論文に頻繁に登場するようになり、その多大な影響力を示すものとなった。『ジェンダー・トラブル』の刊行とその反響の大きさは、当時の彼女を支える力となったと思う。祖母、母、彼女と3代の女たちが紡いできた時空を突然奪われた、その深い悲しみの中で、彼女は、博士論文となった『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』（岩波書店）を2002年に刊行した。同書の「序」には、「勤務校のお茶の水女子大学にジェンダー研究センターが設置されており、活発に活動していること、そしてジェンダー関連の研究や教育が学部、大学院をつうじて大学の中で支援をえて、ごく普通に進められていることも、有形無形にわたしの研究を支えてくれていると思う。研究は一人の人間の思索だけではなく、それを支持してくれるさまざまなサポートな

しには生まれえないものだと、あらためて実感した。」と記されていた。

2000年には、イヴ・セジウィック (Eve Sedgwick) を招聘し、IGSと英文科とが共催して講演会を行った。1997年頃だったか、竹村さんの研究室に行った時、セジウィックの*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* 1985 (『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001年) を手に取り、このホモソーシャルの概念に触発され、彼女の観点からのセクシュアリティの構造を語ることができると述べていた時の表情は、実に生き生きとしていた。セジウィックの講演英文原稿は、『ジェンダー研究』(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編・刊) 第4号に、和訳は竹村和子・大橋洋一共訳「クィア理論をとらえて考える」と題し『現代思想』2000年12月号に掲載された。

このように、トリン、バトラー、セジウィック等に対峙した竹村さんは、彼女のフェミニズム批評理論の幅を広げ、深めていったと思う。

一方で、竹村さんは、IGSが招聘した、少し分野を異にする外国人客員教授の夜間セミナーや講演会のコメンテーターとしても活躍した。2000年度に招聘した タニ・E・バーロウ (Tani E. Barlow) の夜間セミナー「(インター) ナショナルフェミニズムと中国」の「零度の歴史」のコメンテーターを務め、その後展開した論考、タニ・バーロウ／竹村和子「歴史と文学との邂逅——学問分析と研究実践をめぐる対話」が『現代思想』29巻第6号 (2001) に収録されている。

その他にも、IGSが招聘して開催するセミナーや公開講演会には、ディスカッサント、コメンテーター、司会としても関わった。2002年3月2日、オーストラリアのヴェラ・マッキー (Vera Mackie) のシンポジウム「トランス・ナショナルフェミニズムの可能性」、2003年には、台湾の何春蕤による「東アジアにおけるフェミニズムとジェンダー／セクシュアリティ理論の課題」(後に何春蕤著、館かおる・平野恵子編『「性／別」攪乱——台湾における性政治』御茶の水書房、2013年に収録)、2004年度は、IGSに赴任した河野貴代美さんと共に、アメリカのローダ・ケスラー・アンガー (Rhoda Kesler Unger) による「ジェンダーの社会構築——フェミニズムの視点による実証心理学」のセミナー運営に携わった。

2004年から国立大学が法人化されるにあたり、お茶の水女子大学は、ジェンダー研究の推進とその教育体制の確立を目指し、21世紀COEプログラムを申請することになった。原ひろ子後任の伊藤りさんも加わり、私たちはその申請書づくりに邁進し、2003年に採択された。2003年度以降は、竹村さんは、F-GENS の事業推進担当者、プロジェクトD「理論構築と文化表象」及び「文化表象のデータベース作成」担当責任者として目覚ましい活動を展開したことは、天野知香さんの記述にある通りである。私もF-GENSの事務局長を務めながら、プロジェクトCや連携研究の担当責任者として多忙を極めていた。FGENSに参加した教員も学生も、重労働の毎日に疲れていたが、意欲に溢れていた。

21世紀COEが終了した2008年7月には、竹村さんの科研費プロジェクト「暴力と主体構築」とIGSと共催で、「レイ・チョウ (Rey Chow) コロキウム」を開催した (講演原稿は『ジェンダー研究』第12号に収録)。

こうして振り返ってみると、竹村さんにとって、21世紀COEで招聘したバトラー、スピヴァクたちほか、多くの研究者との交流が、彼女の理論をより明晰な、豊かなものに築き上げることに繋がったことは確かである。また、彼女らと交わす息詰まる議論のあとの、竹村さんのチャタリングでコミカルなまでの言動は、一層の親愛を深めるものであった。

彼女は、常に全力疾走しながら、理論を形づくる研究者であった。そして、いささか早く、現世での彼女の疾走を終えてしまった。しかし、彼女が魅かれ、病の床で眺めていた絵に描かれた山脈の向こうで、なおも疾走しているような気がしてならない。

(あまの・ちか／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授
たち・かおる／お茶の水女子大学ジェンダーセンター教授)



1998年6月3日 トリン・ミンハ教授夜間セミナー



2000年11月8日 タニ・バーロウ教授夜間セミナー



2004年12月11日 F-GENS 全体シンポジウム



2006年1月15日 F-GENS
ジュディス・バトラー教授セミナー



2008年5月16日 ゼミ生とともに

竹村和子主要初出論文一覧（刊行年順）

【自著論文】

- 「『眼』『意味』『結末』——小説家としてのポーに関する一試論」『えちゅーど』11号（1981）：pp. 66-82.
- 「『対位法』におけるエクリチュールの選択」『シュンボシオン』1号（1982）：pp. 19-28.
- 「時の侵蝕——『七破風の屋敷』論」『アメリカ文学評論』4号（1982）：pp. 68-75.
- 「『事実』と『虚構』——現代アメリカ文学における『ノンフィクション・ノヴェル』と『ファブレーション』」『香川大学教育学部研究報告』58号（1983年）：pp. 51-69.
- 「空白の頁へ向けて——『ピムの話』における構成の原理」『アメリカ文学評論』5号（1984）：pp. 16-27.
- 「『イーサン・ブランド』論——副題の解説」『アメリカ文学研究』21号（1984）：pp. 83-98.
- 「言説と隠蔽——『ヒギンボタム氏の災難』考ホーソーンにおける時間の相 その一」『アメリカ文学評論』9号（1987）：pp. 79-89.
- 「署名の隙間——『酔いどれ草の仲買人』論」『アメリカ文学評論』10号（1989）：pp. 3-13.
- “A Drama of Relativity, One Representation of ‘Historicity’: *The Blithedale Romance*.” 『成蹊大学文学部紀要』26（1990）：pp. 275-90.
- “The Discourse of Sexuality and the Confession Complex in *The Scarlet Letter*.” *Forum*. 1（1991）：pp. 41-49.
- 「誠首（脱 Cap）——19世紀関税政策と『税関』」『文藝言語研究・文藝篇』22号（1992）：pp. 65-83.
- 「『ロマンス』の占有——独立戦争から南北戦争まで」『英語青年』139巻2号（1993）：pp. 2-6.
- 「自伝という装置——序にかえて」『アメリカ文学評論』13号（1993）：pp. 1-10.
- “The Reciprocity between “The Gentle Boy” and the Emerging Domestic Ideology in early Nineteenth-Century America.” *Forum*. 2（1993）：pp. 47-59.
- “Women and ‘Imagined Nation-Family’ in *The Dancing Girl*.” 『アメリカ文学評論』15号（1995）：pp. 22-34.
- 「カミングアウトして、どこへ——ジュディス・パトラーとレズビアン映像表象」『イマージ』7巻6号（1996）：pp. 182-93.
- 「『ロマンティックな友情』からセクソロジー前夜まで——レズビアン研究の可能性（1）」『英語青年』142巻4号（1996）：pp. 187-89.
- 「『呪いの文学』から『ガイドブック文学』まで——レズビアン研究の可能性（2）」『英語青年』142巻5号（1996）：pp. 262-64, 268.
- 「フェミニズムとの関わり——レズビアン研究の可能性（3）」『英語青年』142巻6号（1996）：pp. 318-20.
- 「女は『欲望の主体』となるか 精神分析と社会構成論——レズビアン研究の可能性（4）」『英語青年』142巻7号（1996）：pp. 376-78.
- 「カミングアウト物語と有色人レズビアンの対抗表象 レズビアン表象／理論の今——レズビアン研究の可能性（5）」『英語青年』142巻8号（1996）：pp. 430-32.
- 「セックスの『形態学』——レズビアン研究の可能性（6）」『英語青年』142巻9号（1996）：pp. 475-79.
- 「『噂』の俳優——グレッタ・ガルボをクィアに見る」『ユリイカ』28巻13号（1996）：pp. 190-203.
- 「〈現実界〉は非歴史的に性化されているか——フェミニズムとジジエク」『現代思想』24巻15号（1996）：pp. 196-210.
- 「忘却／取り込みの戦略——バイセクシュアリティ序説」『現代思想』25巻6号（1997）：pp. 248-56.
- 「資本主義社会とセクシュアリティ——〔ヘテロ〕セクシズムの解体へ向けて」『思想』879号（1997）：pp. 71-104.
- 「〈彼女〉はどこから語るのか——ヴァージニア・ウルフの遺言」『現代思想』25巻13号（1997）：pp. 68-82.
- 「愛について」『思想』886号（1998）：pp. 5-33.
- 「別れる理由、あるいは別離という生——シリーズとしてのレズビアン・パルプフィクション」『國文学』44巻1号（1999）：pp. 28-35.
- 「ポストコロニアルなスタンス——トリン・T・ミンハを読む」『イメージ・フォーラム』1巻2号（1999）：pp. 89-93.
- 「あなたを忘れない（上）——性の制度の『脱-再生産』」『思想』904（1999）：pp. 109-33.
- 「あなたを忘れない（下）——性の制度の『脱-再生産』」『思想』905（1999）：pp. 121-39.
- 「アイデンティティの倫理——差異と平等の政治的パドックスのなかで」『思想』913号（2000）：pp. 23-58.
- 「〈普遍〉ではなく〈正義〉を——翻訳の残余が求めるもの」『思想』925号（2001）：pp. 252-74.
- 「『翻訳の政治』——誰に出会うのか」『近代日本文学』64集（2001）：pp. 246-35.
- 「親族関係のブラック／ホワイトホール——『アブサロム、アブサロム！』を乱交的に読む」『フォクナー』4号（2002）：pp. 40-53.
- 「『欲望』の『夢』の出来事を生きたら——『マルホランド・ドライブ』をとらえて」『大航海』43号（2002）：pp. 110-18.
- 「生存／死に挑戦する親族関係——セクシュアリティ研究の理論展開」『アンティゴネーの主張』（2002）：pp. 181-99.
- 「『ファルス』の展開——グローバル化／文学表象／ジェンダー：アメリカ文学の場合」『「グローバル化とジェンダー規範」に関する研究報告書』（2002）：pp. 55-62.
- 「暴力のその後——「亡霊」「自爆」「悲嘆」のサイクルを穿て」『思想』955号（2003）：pp. 35-59.
- 「『アメリカ』のロリータ、あるいは空間の記憶喪失」『英語青年』150巻1号（2004）：pp. 14-16.

- 「修辞的介入と暴力への対峙——〈社会的なもの〉はいかに〈政治的なもの〉になるか」『社会学評論』219号（第55巻第3号）（2004）：pp. 172-88.
- 「何かをおこなう〈女〉たち——アメリカ小説のフェミニスト・ジャンル考」『英語青年』151巻8号（2005）：pp. 454-56.
- “Violence-Invested (non)Desire, Global Phallomorphism & Lethal Biopolitics.” *F-GENS Journal*. 3 (2005): pp. 65-71.
- 「対抗テロリズム小説は可能か——『マオⅡ』（1991）から『標本的日々』（2005）へ」『アメリカ研究』40号（2006）：pp. 19-37.
- “Pure Love” and Constitutional Amendments, Yukio Mishima and Today's Cinematization of His Novel.” *F-GENS Journal*. 5 (2006): pp. 97-103.
- 「〈テロリストの身体〉のその後——『カサマシマ公爵夫人』の終わり方」『英語青年』152巻6号（2006）：pp. 337-40.
- 「マゾヒスティック・エイジェンシーの（不）可能性——アブグレイブ写真・『ソドムの市』・『ドッグヴィル』におけるプンクトゥムと暴力」『立命館言語文化研究』18巻2号（2006）：pp. 3-13.
- 「『新しき』共同体とジェンダー／セクシュアリティ——トランスパシフィック・テクスチュアリティ」『歴史・国家・女性』（2006）：pp. 153-162.
- 「穿視する観客／行為者——ローラ・マルヴィ『ニュー・テクノロジーから観る』への応答」『言語文化』23号（2006）：pp. 298-302.
- 「未来のバトラーとの対話に向けて」『思想』989号（2006）：pp. 16-25.
- 「スクリーンからの手紙はどこに届くのか——日韓米の戦争映画とジェンダー言説」『文化表象の政治学——日韓女性史の再解釈』（2007）：pp. 124-34.
- 「デリダの贈与、脱構築／ポリティックス／ポスト性的差異」別冊『環』13号（2007）：pp. 342-55.
- “Human/Inhuman: Death and Life in Biopolitics.” *F-GENS Journal*. 10 (2008): pp. 52-57.
- “Gaze and Bio-Death Politics.” *Women's Bodies in the Age of Bio-Tech*. (2008): pp. 69-79. (English) & 80-89 (Korean).
- 「マルチチュード／暴力／ジェンダー」『現代思想』36巻5号（2008）：pp. 118-23.
- 「『戦争の世紀』のフェミニズム」『神奈川大学評論』第60号（2008）：pp. 76-83.
- “Foreignness and Friendship, American Studies and Gender Studies.” *Nanzan Review of American Studies Journal*. 30 Center for American Studies, Nanzan University (2008) : pp. 63-73.
- 「精神分析」『ジェンダー史学』第4号（2008）：pp. 57-61.
- 「死の領有——戦争映画と純愛物語が交差するところ」*Femininity Consumption, History, and Memories* (2009) : pp. 18-34 (Japanese) & 35-48 (Chinese).
- 「生政治とパッション（受動性／受苦）——仮定法で語り継ぐこと」『思想』1033号（2010）：pp. 201-27.
- “Feminst Studies/Activities in Japan, Present and Future.” *LECTORA*. 16 (2010): pp. 13-33.
- “(Counter-)transference and the politics of feminist therapy: toward naming a new 'problematics that has no name'.” *Feminism & Psychology*. 21. 4. (2011) : pp. 529-35.

【翻訳論文】

- マイケル・ライアン「ポストモダンの政治学」『現代思想』15巻15号（1987）：pp. 208-27.
- マーティン・シュワップ「科学技術の鏡」『現代思想』16巻2号（1988）：pp. 137-53.
- ジェフ・ベニングトン＋ロバート・ヤング「問題としての歴史」『現代思想』17巻2号（1989）：pp. 52-61.
- ライラ・アブ＝ルゴド「ヴェールにおおわれた感情」『現代思想』17巻14号（1989）：pp. 112-33.
- ジャック・デリダ＋イムレ・サルジンスキー「戯れする貴重な自由——ディコンストラクションと教育／制度」『現代思想』17巻8号（1989）：pp. 46-56.
- クリストファー・ティリー「物質文化を解釈する」『現代思想』18巻12号（1990）：pp. 99-109.
- ルートミラー・ジョーダノヴァ「解剖される他者——科学の前にヴェールを剥ぐ自然」『現代思想』19巻3号（1991）：pp. 180-204.
- P・アダムズ／J・ミンソン「フェミニズムにおける『主体』の問題」『現代思想』20巻1号（1992）：pp. 40-57.
- ジー・ザラー・T・キャプラン＋レスリー・J・ロジャーズ「性は定義できるか——生物還元主義による『正常』認定の嘘」『現代思想』20巻5号（1992）：pp. 202-22.
- ガヤトリ・C・スピヴァック「ポストコロニアリズム批評」『越境する世界文学』（1992）：pp. 269-76.
- ダグラス・クリンプ「エイズの時代にいかに乱交を続けるか」『セックスなんてこわくない』（1993）：pp. 73-108.
- トリン・T・ミンハ「私の外の他者／私の内の他者」『へるめす』50号（1994）：pp. 60-76.
- ジュディス・バトラー「パフォーマンズとしてのジェンダー」『批評空間』Ⅱ-8号（1996）：pp. 48-63.
- ジュディス・バトラー「触発する言葉——パフォーマティヴィティの政治性」『思想』892号（1998）：pp. 7-46.
- イヴ・K・セジウィック「クイア理論をとおして考える」『現代思想』28巻14号（2000）：pp. 30-42.
- ジュディス・バトラー「倫理の両義性」『批評空間』Ⅲ-2号（2002）：pp. 200-208.
- ジュディス・バトラー「自分の生と名に、いかに最後に応えるか」『現代思想』32巻15号（2004）：pp. 80-85.
- ジュディス・バトラー「ジェンダーをほどく」『思想』989号（2006）：pp. 4-15.